

バレエ評論家・薄井憲二のソ連体験

——シベリア抑留とモスクワ平和友好祭の思い出(中)——

半谷史郎

薄井：だから、500～600人の収容所で、中学を出た人は3～4人いるかです。あっ、東大に在学中という人が1人いたかな。でも、その人はちょっと気が弱すぎたんでしょう、みんなに嫌われていた。なんでかという、寒さだとかで、みんながおなかを壊すでしょう。そうすると、トイレに行って排泄物を洗って、その中に混じっている雑穀みたいな、消化できていないものを食べたということで、その人は軽蔑されていたんです。でも、そこまではないけれど、それに近い飢餓にさいなまれることはあったから人ごとではない。ただ、自分はそこまではできない。

半谷：でも、可能性としてはあったかもしれない。

薄井：あったかもしれないと思う。仕方がないことだとは思いますが、恥づかしいでしょう。でも、そういう環境の中でも、自分のパンを分けてよこす人だっているの。私はたばこを吸わないから、それはあげましたけど。たばこだけは割合、きっちり配給になるんです。ともかく、教育の違いで皆さんかわいそうです。

半谷：かなりありますか。世の中の見方が変わるという違いが。

薄井：うん。だから、そういう意味で特別と言われれば、仕方がない。特別かもしれないです。それから、教育のおかげで社会への順応性も養われたかもしれない、違う環境に。

半谷：違う環境でも自分を慣らす。でも、ここから先は薄井さん個人の話ですが、動員されて入隊した1カ月後に盲腸炎になって入院。ほとんど任務に就かずに終戦を迎えるとか、あとは、シベリア抑留中も熱が出たら、そのまましばらく熱が下がらないと言っていたとか¹⁾。

薄井：1カ月ぐらい病室にいた。

半谷：だから、ある意味、ずる賢さもあるのかなと思ったんですけれども。

薄井：そのぐらいの知恵はあるの。

半谷：生き延びる知恵ですか。

薄井：だって、人に迷惑は掛からないじゃない。

半谷：でも、そういうところで生真面目にやる人もいるので。

薄井：そうなの。

半谷：義務感に駆られて生真面目に動く人が。

薄井：お医者さんをだますのは病室だけじゃないです。ある日、鳥目になった。でも、不思議なことに、眼医者に聞けば分かるでしょうが、菱形の部分だけは見えるんです。網膜に菱形の部分があるのかな。だから、そのぐらいの部分は見えるけれども、周りは黒いんです。鳥目と分かってお医者さんに行ったら、肝油をくれた。もらった肝油を1回飲んだだけで見えるようになって、でも毎日まだ見えないと言って2週間ぐらいもらった。

半谷：それはどこの話ですか。

薄井：46年の夏。

半谷：じゃあ、抑留中の話ですね。

薄井：46年の夏、ハバロフスクの天幕生活のときです。

半谷：そういう話はいろいろありますね。

薄井：今は余計なことだけれども、天幕生活のうちに私はだんだん熱が下がらなくなって、具合が悪くなってきた。9月を過ぎると寒くてもう天幕にいられなくて、貨車に乗って移動するんですが、そのときに両側から抱えられて貨車に乗るぐらいだったの。それで病室に入ります。そして、病室は暖かいから次の日に治ったの。

天幕生活のときは、野原だから水道がないわけ。1日に2回ぐらい水のタンクがトラックで来る。でも、足りないんです。みんなにちょっとしか渡らない。天幕のキャンプ場の中に井戸があって、井戸には水がある。でも生水だから、それを飲むと危ないんです。そこはアムール川の支流の縁だったので、ちょっと歩けば川なんです。だから、川の水だったらあるんです。私は井戸の水も飲んだし、川の水も飲んだけれども、何も起こらなかった。

半谷：丈夫ですね。

薄井：でも、それを飲んでチフスになって病院に運ばれる人はたくさんいたんです。でも、私は忍耐力がないから、誘惑に弱いからね。

半谷：だんだん戦争の話に、抑留の話になっているので、順番に行きましょう。まず確認ですが、抑留中はどういう経路で移動していましたか。まずブハト〔博克図〕で終戦になって、そこで捕まってチチハルまで夜通し歩

かされ、さらに貨車で。

薄井：ブハトから昂昂溪^{こうこうけい}という所まで汽車で行きます。われわれは鉄道隊だったので。

半谷：鉄道第2連隊。

薄井：そう、そう。終戦のときは第20連隊に名前だけ変わっていました。昂昂溪まで行くんです。ここは避暑地みたいです。

半谷：そこから歩く。

薄井：ブハトから昂昂溪までは汽車。そこで降ろされて、チチハルまで歩く。チチハルの駅で武装解除です。

半谷：そこで貨車に乗せられたんですか。

薄井：チチハルに一月半ぐらいいるの。チチハルは日本軍の軍事物資の集積場だったの。兵役廠でもあり糧秣廠でもあり、集積場だったんです。非常に広い地域。そこで一月半ぐらい生活します。捕虜はあちこちから集められて部隊編成もやり直して、向こうの受け入れ態勢も見極めて、そういう時間が必要だったんでしょう。北満鉄道までつながっているシベリア本線は単線かな複線かな。とにかく輸送がつかえていたんだと思う。だから、すぐには送れなかったんだと思います。

半谷：そうすると、ソ連に入ったのはいつなんですか。

薄井：10月20日すぎ。

半谷：入って最終的にチタまで行ったんですか。

薄井：チタの手前でトゥリンスカヤって言います。多分チタの近くです。何となく人づてに聞きました。

半谷：そこで冬を越されるんですか。

薄井：そうです。

半谷：その辺りだと寒いですね。

薄井：川の縁だし。

半谷：マイナス40度ぐらいまで行くんじゃないですか。

薄井：でも、40度すぎたら働かなくていい。

半谷：だから、温度計は見えないようにしたとか、いろいろな話がありますね。1年目の冬がそこ。

薄井：われわれの部隊は130人ぐらいだったんです。みんなで山に〔伐採に〕行った。どの部隊もみんな一応、山に行くんですが、3日ぐらいしてから、われわれ130人ぐらいだけ下に下りるんです。つまり、向こうは間違えて

全部やってしまったんだね。下にも置いておかなきゃ困ると後から気が付く。あれはやっぱりロシアだよな。

半谷：甘いですね。

薄井：一冬の間にもわれわれは130人ぐらいて、村だから1人しか死ななかつた。村だから何となく人との交流があつて。

半谷：物ももらえたり、それは幸運ですよ。

薄井：運よね。

半谷：1年目の冬は大変ですからね。

薄井：だから、人間として恥ずかしいこともありました。人に迷惑は掛からないんだけど、自分では忘れられない。

半谷：こんなことをやってしまったというお気持ちですか。

薄井：私は年度でいえば一番下の兵隊だから、何でも一番先に余計な仕事に出されます。でも、余計な仕事は役得もつくって知っていました。ある日、行った所がロシア軍の食堂だったんです。彼らは食べ終わって帰るときに、お皿に残ったものをバケツに捨てていく。食堂がクローズするとき、食堂の当番のロシア人がバケツを私の所に持ってきて、これを全部食べていいと。私は本当に全部食べた。

半谷：いや、でも、そうしないと生き延びられないですよ。

薄井：バケツにこれぐらいあつたんですよ。でも、それだけだったら、そんなに恥ずかしくない。1人でまた部隊へ帰るでしょう。そうすると、私の晩飯が取つてあつたわけ。とても悲しい、これぐらいのパンとこれ1杯分ぐらいのカーシャが取つてあつたわけ。バケツでおなかがいっぱいになっているんだから、人にやればいいじゃないですか。でも飢えているからできない。また食べたの。ほとんど歩けないぐらいの状態で夕方の点呼に出た、人間改めに。自分で恥ずかしいです。思い出さないで忘れていたのに、あなたが聞いたから思い出した。

半谷：だから話を聞くと、人と話をすると面白いんです。

薄井：ともあれ、1人しか死ななかつたんです。珍しいですよ。山のほうは何十人も死んでいるのに。

半谷：肉体労働で。

薄井：ええ。同じ部隊の人だから誰が死んだと話にも出るしね。ある日、山からみんなが下りてきて、駅の辺りで野宿するようになる。汽車を待っていて、汽車に乗ってハバロフスクまで戻る。

半谷：それが21年の夏ですね。

薄井：そうです。

半谷：ハバロフスクで先ほど言ったテント暮らし、天幕暮らしがあって、その後がキルガなんですか。

薄井：ペトルシーです。1957年〔のモスクワ平和友好祭に行く途中〕にペトルシーを通ったときは昼間だったので、汽車から見えました。でも、兵舎が3つぐらい、それから付属の建物も何軒かあったのに、廃虚になっていた。もう人が住んでいない。崩れ落ちていました。

半谷：ペトルシーはどれぐらいいらしたんですか。冬はこのペトルシーで越されたのですか。

薄井：そう。ハバロフスクのつながりだから、言うのを忘れたけれども、私は労働大隊、рабочий батальон²⁾だから、割合こうなんです。天幕生活の間に20人ぐらい入ってきたり、出ていったり。

半谷：出入りが結構ある。

薄井：非常にあるの。ペトルシーもあるんです。ペトルシーは多分、春頃までいるの。

半谷：22年の春ですね。すると、22年の夏はどちらにいらしたんですか。

薄井：キルガ。

半谷：そこからキルガなんですか。この後がキルガで。

薄井：だから、感じとしてはキルガが長いんです。

半谷：1年ぐらい。

薄井：ええ。

半谷：キルガは23年の秋までと、毎日の記事〔2016年10月9日朝刊の「ストーリー：薄井さんのシベリア抑留」〕に書いてありました。

薄井：やっぱり夏までかもしれない。

半谷：夏まで³⁾。

薄井：キルガから私は1人で、政治部の少尉さんと車で待ち合わせて、2人でハバロフスクまで行くんです。

半谷：何か特別な任務があったんですか〔後出287ページの注記参照〕。

薄井：分からないです。

半谷：でも、指名されたんですよ。

薄井：その少尉さんはペトルシーのときに初めて会った人なの。地方〔軍に入る前の民間時代のこと〕では英語の先生だったの。でも、英語はできな

い。だから、英語を教えてくれとなって、じゃあ私はロシア語を習いますと交換教授みたいにして、しょっちゅうペトルシーのときに教えに行っていたから。

半谷：もしかして、その人がアレクサンドル・パレンスキーですか⁴⁾。

薄井：そうです。アレクサンドル・パレンスキー。

半谷：そこで知り合ったんですね。

薄井：字で書くとホレンスキーだと思う。

半谷：ホレンスキーですか。

薄井：ええ。ホレンスキー、Lです [Холенский]。アレクサンドル・フォードロヴィチだったんです。住所も覚えていますよ。

半谷：それは、そのときに覚えてずっとですか。オムスクはわかりますが。

薄井：17 рабочая, дом номер 7です。

半谷：さすが、すごい記憶力ですね。

薄井：いやいや、57年につながるんだもん。

半谷：やはり覚えていらしたんですね。

薄井：まだ覚えていますよ。後の話になりますが、ペルミのコンクール〔第1回は1990年〕に行ったときに、写真家でオムスクから来ている人がいたの。だから、オムスクに知人がいるんだけど、捜してくれないかと頼んだ。ペルミのコンクールは2年に一度で、2年したときにまた会ったら、捜したけれども、いろいろ区画整理になっていて、この住所はもうないし、いた人はどこに行ったか分からなかったと言っていました。

半谷：そうだったんですね。パレンスキーさん、ホレンスキーかもしれないけれども、この方の話は詳しく伺いたいと思っていました。職業軍人なんですか、それとも、徴兵されて来ていた、どちらですか。

薄井：徴兵です。だって、地方では英語の先生だったと言うんだもん。

半谷：収容所では何をされていたんですか。

薄井：政治部の将校。

半谷：そうすると、中央から降ってくる指示を下に伝える役目ですよ。

薄井：政治教育を監督しなさいです。そのときにほとんど初めて政治教育が始まるんですよ、『日本新聞』を主軸にして。でも、ロシア人は一切関わらなかったです。

半谷：あれは日本人のアイディアで、日本人がやったことですか。

薄井：でも、指示があったには相違ないでしょう。

半谷：そうですね。これをやれと。

薄井：でも、一遍も顔を出さないし、助言もしないし、何もしないで。それは最後までずっとそうです。

半谷：日本人の中に誰か責任者がいて、そこが政治教育自体はやっているんですよ。

薄井：ある程度はそうです。そういうことが始まると、ある程度、自分がやろうという人が出てくるわけ。ペトルシーでは、映画に関係があった人で西沢治という人がやっていた。西沢さんはカリスマ的魅力があったんです。人を説き伏せる術にたけていた。だから、この人のおかげで随分、政治教育が。

半谷：浸透しました？

薄井：そう、そう。中心に自分になろうという気になって随分。だから、この人はいつでも収容所の寄り合いがあると、会いたいとみんなが思っているぐらい、みんなが懐かしがっている。だけど、とうとうつかまらなかった。分からなかった。今、もう生きているか分からないですよ。私より1つぐらい上かもしれない。

半谷：すいません、ホレンスキーさんに話を戻させて下さい。かなり深い付き合いをされておうちまで行っておられるようですが、奥さんのタチヤーナさん、歯医者さん。

薄井：奥さんといつ結婚したか覚えてないんですが、キルガにいるときに結婚したと思うんです。

半谷：そこの新居に行かれていますか。

薄井：割合しょっちゅう。ペトルシーでは1人だったんです。奥さんはいなかった。だから、英語とロシア語を交換するのも官舎でやりました。

半谷：キルガにいた時は奥さんが……。

薄井：キルガのある時点で奥さんができたの。

半谷：娘さんが2人いると書いてありました⁵⁾。

薄井：そうですね。私はそれを忘れていたけれども、モスクワで会ったときに彼が言ったのかもしれない。

半谷：文藝春秋に書かれていることですが、日本語で〈リゴレット〉を歌ったとか、チェスを教えてもらったとか。普通の生活があるなと思って。

薄井：かもしれない。しょっちゅう奥さんと一緒にチェスをやっていました。奥さんが私にチェスをすごく教えたいの。

半谷：相手が欲しい。

薄井：だけど、私はああいうゲームに向いていなくて、どうしても覚えられないんです。だから、分かったふりをしていた。

半谷：パレンスキーは、日本語の通訳ではないんですか。

薄井：日本語通訳の政治部将校で来たのかもしれないです。

半谷：でも、日本語はどうなんですか。

薄井：ほとんどできない。

半谷：英語もほとんどできない。

薄井：でも、英語の先生だったから。

半谷：だから、ある意味、英語の先生だからやらされたのかな。

薄井：そうかも。

半谷：語学を多少やっているからかな。逆に言うと、薄井さんはなぜ目を付けられたんですか。というか、なぜパレンスキーさんと知り合いになられたんですか。

薄井：だって、彼は政治部の将校だから。

半谷：でも、日本人は他にいっぱいいるわけでしょう。

薄井：そうね。だけど、私はその頃、片言のロシア語はできるし、英語はできるし。学校に行っているという顔をしていたんじゃない？

半谷：こいつなら話ができるという。

薄井：だって、元へ戻りますけれども、トゥリンスカヤで生活が始まったときに、そこに着いて2週間くらいかな、朝、行進して仕事場まで行くでしょう。そのときに兵隊を受け取りに来ている現場の上役のような人がつかつかと私の所へ歩いてきて、君は何年、学校に行ったのかと聞いたもん。

半谷：それは何語で？

薄井：ロシア語で聞いたんだけど、何となく分かったんです。

半谷：多分、そういう意味だろうと。

薄井：うん。何となく分かったの。だから、数ぐらいは割合すぐに覚えたから、考えて多分、14年とか17年とか言ったんでしょう。私は大学が университет と言うのは知らなかったけれど、あんなものはラテン語からきているんだから全部同じだろうからユニバーシティを。

半谷：言っているんだろうと。

薄井：ええ、ローマ字読みにただけでね。通じてそうかと言って感心して、次の日からは私と目が合うと、常に帽子を取ってお辞儀をしたもん。

半谷：周りとは違うところが、あったんでしょう。

薄井：帰ってきてから、当時みんなからいじめられていた兵隊さんから電話がかかってきて、会いたいと言われたことがあります。結局その人とは会う暇がなかったんですが、そのときに薄井さんが教育を受けた人というのは一遍で分かりましたと言われた。政治教育でもいじめられたし、普段の生活でもいじめられた。おとなしい人だったから。東京の人じゃなくて、どこかから東京へ出て来た時に、私の電話番号を覚えていて電話してきたんでしょう。会えなくて悪かったですけれども。とにかくそう言われたから、私は学校へ行っているという顔をしていたのかもしれないです。

半谷：シベリア抑留の体験を読むと、通訳は日本人とロシア人をつなぐ大事な仕事で、どうやって見つけるかは大問題です。高等教育を受けている人は語学ができるだろうと、即製のロシア語通訳になっていくという話が結構あります。

薄井：そうですね。私は偶然なんです。キルガにいるときは、マンガンの将校〔満洲国軍の将校〕だった人が何人かいた。それがあの日、全部いなくなったんです。満軍の将校だった人がプロラブ〔пролаб〕、その日の労働を割り当てる役目をやっていました。

それをすぐに私がやれと言われた。だから、いろんなことを覚えなきゃならないから役所に行ってノルマの本を見ました。ノルマの本を見てよく分かったこともあるけれども、誰をどこへ出すんだというのは全部、計画して毎日やっていたから、ロシア語の力は上がりました⁶⁾。

半谷：そういうふうなんですね。

薄井：だから急にパッと通訳になったわけじゃなくて、だんだんに分かってきた。大体キルガにいる時の私の主な仕事は馬車引きだったんですもん。

半谷：そう書かれていましたね⁷⁾。

薄井：書いているでしょう。

半谷：荷馬車の馭者だったと。村人の私用を引き受けていたと。

薄井：しょっちゅう頼まれるわけ。材木工場があったから、板になった端のほうのカスが出る。そういうものを働いている人はもらってどこかにまとめておいて、ある程度の量になると自分の家で使う。たきぎにだってなるんだから、うちへ運んでくれないかと言うわけ。だから馬車に載せていくでしょう。

それから収容所の中庭で映画会があったときに、それを持ってきたロシ

ア人の兵隊から学んだことがあります。4～5人の兵隊がスクリーンを立てて映写機を据え付けて用意して、それから、ちょっと言葉が分かるから助けていた私に向かって何を言ったと思います。お茶をもらえるかと言ったんです。私はすぐに分かった。これはお茶だけじゃなくて食べ物のことだ。

だから、そうやって学んでいるわけ。大体は黙っていても、物を運んだら自分の畑で取れた野菜とか何かをくれる。でも、くれないうちは水をもらえる？と言う。そうすると、向こうも初めて気が付くの。これはロシア人から学んだの。

半谷：うーん、そういうところの生活力は非常にありますね。

薄井：かもしれない。

半谷：ロシア語をどうやって身に付けたかは、これでよく分かりました。

薄井：2年目のペトルシーのときから個人教授でロシア語を習っているから、どんどんボキャブラリーも増えていくしね。後の話ですけど、ペトルシーからキルガに移動するときに、私は軍隊の馬を連れていかなきゃならなかった。

ペトルシーのときは馬はそんなにいなかったからよかったんだけど、牛がいたの。牛も私の係だったから、時々いなくなってしまうととても大変。野原を捜して、また連れて帰ってこなきゃいけない。牛なんて言うことを聞かないからね。

だから、本業はずっと馬車引きだったけれど、将校がいなくなったからプロラブになって、できればたまには馬車引きもやってあげて、日本人でやる人が他にいないからね。

半谷：抑留中にバレエ映画を見たのは有名な話で、いろいろところで目にしました⁸⁾。

薄井：バレエの映画を観た話。

半谷：非常にいい話だとも思います。

薄井：キルガで観たの。キルガの製材所は発動機でやっていたんで、電気はなかったんですけど、どこからか線を引いて収容所の中庭で映画をやった。

半谷：収容所には娯楽を見せる義務があるんじゃないでしょうか⁹⁾。

薄井：でも、材木工場の発電の設備が改善されて、容量が大きくなったらしくて村の家も。

半谷：電化されたという話でしたね。

薄井：われわれの兵舎も電気がつくようになったんですもん。だから、トゥリンスカヤの時に昼飯と電気のある所に行きたいと思っていたのが半分はかないました。

半谷：ほかに質問として、兵隊の時代、それから、抑留の時代にバレエは全然縁がないんですか。捕虜の演芸会でバレエを披露したという話はどこかに書いてありましたが……¹⁰⁾。

薄井：自分勝手に。それから、キルガも政治教育の時代だから、殺された市川〔正一：1945年3月獄中死〕という共産主義者がいる？ その人の書いた詩が日本新聞に載って、それを西沢君が朗読して、その朗読に合わせて。

半谷：踊られた。

薄井：まあ、バレエじゃなくてニューダンスよ。それから、自分勝手に考えた、誰かがロシア民謡か何かを歌って、それに合わせて踊るとか、そういうのもあった。

半谷：音楽の方の有名な話だと、沿海州楽劇団という名前で音楽家の人が演奏して回るというのもありました¹¹⁾。

薄井：そうらしいですね。

半谷：井上頼豊、北川剛、黒柳守綱といった人がアコーディオンとかバイオリンとか寄せ集めなどで。バレエはないですか。

薄井：それは多分、内務省の人がいたからでしょう。〔軍が管轄して頻繁に移動する〕労働大隊はそこまでの配慮はないの。

半谷：ないですか。

半谷：こういう話を聞きながら思うのは、高杉一郎さんの『極光のかげに』という本、あの中に出てくる感覚とよく似ている。ロシアの人と人間的な付き合いがあって、ソ連を全否定するのではなく、人間として付き合いながら生きていくという話が書かれています。読まれたことはありますか。

薄井：ええ。あれだけは読みました。あれが出たときに〔『極光のかげに』の初出（目黒書店）は、薄井さんの帰国翌年の1950年〕、すぐにあれだけは読んだ。その後は読まないです。

半谷：ご感想はどうですか。

薄井：状況をととても公平な目で眺めていると思う。

半谷：あれは歴史として、今、読んでもいいなと思う本です。

薄井：私はとても感心しました。

半谷：体験としてよく似ていると思います、いろいろな側面をきちんと踏まえた形の抑留のお話が。

薄井：似ている？

半谷：はい。

薄井：私は読んだときに、これを書いた方は非常に頭がいいと思った。

半谷：あの方も大卒です。『改造』の編集をされていました。いろいろな面を複眼で見ているのと、生身のロシア人と付き合っ、ロシア人がどういう人なのかがよく分かっている。個人的には、言葉が大事ななと思いました。ロシア人と話するには言葉が分からないと。だから、そういう意味で、よく似ていると思ったんです。薄井さんはご自分の抑留体験をあまり語ってこられなかったんですか。

薄井：いや、私は聞かれないから。

半谷：聞かれないからですか。

薄井：そうよ。それから、みんな遠慮したみたい。バレエの世界では、聞いちゃ悪いだろうと思っていた人もいるみたいです。私の前の前のバレエ協会の会長だった島田廣さんは韓国人だから、余計に人種の違いというのにナーバスなわけ。だから、薄井さんに抑留のことを聞いちゃ駄目だと、みんなに言っていたみたいです。私は別に構わないんですけどね。

半谷：あと、軍隊の話でいうと、軍隊の同窓会はあったんですか。

薄井：収容所の同窓会。

半谷：収容所の同窓会はあった。

薄井：あったの。ずっとあったの。でも、共産党の人が主導権を持っていたから、ちょっと変な部分があった。例えば京都でも2回ぐらいあったんですが、私はもう京都にいるからいいけれど、参加する人は泊まるし、宴会もあるから会費が要るわけです。自営業の人は1,000円増しか、2,000円増しか、3,000円増し。そんなに〔大幅な上乘せでは〕なかったけれども、そうなの。企業で働いている人は決められた会費だけ。労働組合員、そういう人は決められた会費だけ。でも、自営業の人は。

半谷：上乘せがある。

薄井：上乘せがあって何割か忘れた、幾らか忘れたけれども、そういう決まりだったんです。そういうことごとごとが起きたし、ちょっと剰余金をためたりもしていたらしい。そういうことも問題になってやり方が変

わって行って、同じ収容所だけじゃなくて、抑留者の集まりでやりましよう。最後の3～4年ぐらいは、それでやりました。

半谷：いろいろな思い出がおりなの、よく分かりました。ここまでで2時間半しゃべっていますが、大丈夫ですか。

薄井：まだもう少し大丈夫。

半谷：大丈夫ですか。では、ちょっと休憩してから、帰国と友好祭の話をお願いします。

休憩の後、聞き取りを再開したが、手違いで冒頭5分ほどを録音しそこねた。手元のメモに「政治教育のつらさ（したがっているふりをする）¹²⁾——でもその責任者のあいびきを通訳したので、対応に手心があった」とあるのは、『毎日新聞』2015年3月16日夕刊記事の繰り返しだろう。

また先に昭和23年の夏に「キルガから私は1人で、政治部の少尉さんと駅で待ち合わせて、2人でハバロフスクまで行く」と語っていた（279ページ）が、メモ書きには「パレンスキーとハバロフスクを歩いていると、日本語放送で英（語と）露（語の）できる人をさがしている」「ハバ（＝ハバロフスク）でバレエ学校の広告を新聞で見た。帰化（してもいいかなとちらっと思った）」という注目すべき記載がある。

これは、当局が薄井さんのバレエの才能に目をつけ、有力な文化活動家として仕事を任せるために、ハバロフスクで面接をしたのではないか。また、薄井さんは誰に会ったという話はしていない。民主運動の中心地である日本新聞社に行ったなら、日本人に会って、偽名であっても名前くらいは言って記憶に残っているだろう。覚えていないということは、会ったのはロシア人ではないか（ハバロフスク軍管区の政治部長か）。

薄井：給料をどこかでくすねているの。キルガで2回ぐらいもらっただけですもん。それ以外、一銭ももらったことがない¹³⁾。内務省の人は定期的にもらっていたみたいです。それから、赤十字の往復はがき。あれはペトルシーのときに、われわれはもらったんです。うちに帰ったら届いていた。だけど、返事はみんな出したと言うのに、来なかった¹⁴⁾。労働大隊は汚職もあったろうし、いろいろ怠けていたんだ。

半谷：結局、ソ連に残ると言う話はなくなった。

薄井：そう、そう。それでナホトカに着いたのは昭和23年で、そのときに通訳が1人要ると言うので、申し出て私が残りました。でも、何をするのか知らなかった。とにかく残れという話だから、また汽車に乗ってどこ

か知らない収容所に配属されて、全然知らない所に行くのは嫌だと思ったけれども、そうなっても仕方がない気ではいました。

そうしたら、トランジットナヤでした。私が行った収容所は第二分所と第四分所が準備段階で、第三分所がザクラニーチナヤ〔出国〕なんです。第三分所に行くといミグレーションは通っているわけで、外へ出られなくなる。そういう第三分所の係になったわけです¹⁵⁾。

ナホトカに来ると、みんな日本語で感想文を書かされます。最初はその翻訳をさせられます。だけど、日本語をロシア語に直すほどの作業はできないから、いいかげんです。ずっとそれをしていました。

そのうちに事務のほうが忙しくなってきます。第三分所だからイミグレーションを越えていて、帰るのがほとんど決まっている人ですから、だんだん名簿と人間と間違いがないか照合する役目になりました。

そのときは所長ではなかったんですが、輸送が終わって保安要員だけになると所長という役目も仰せつかって、収容所を翌年の輸送再開に備えて立て直し、きれいにするのが任務でした。

半谷：そうすると、それが帰るまで続くんですか。

薄井：そう、そう。

半谷：1年弱ありますね。

薄井：1年弱。それは割合、大変だったんです。だって、収容所長は полковник〔大佐〕なんです。たしかサウーリンと言います。その人がお金はゼロなのに、収容所の今までのバラックを取り払って全部、板張りにする。お金ゼロでよ。それから門を作り直して、上に красная звезда〔赤い星〕の形の赤いきれを貼って中に電球をとます。そういうようなことを全部、図面にして渡されて。

半谷：作れと。

薄井：ええ。でも、お金はない。〔冬になって〕輸送が止まったらザクラニーチナヤもなくなるから外へ出られるので、町に行ってお金をくれそうな事務所を探すわけ。それが大変でした。兵隊だけ労働力として出すけど、お金はくれないという人も出たり、最後は材木で家の部品を製造している所があることを突き止めて、夜に盗みに入った。

半谷：ソ連的ですね。

薄井：ソ連的でしょう。一週、盗みに入って、多分それで気付かれたから警戒が強くなって、2回目のときに捕まったの。運ぶ人も連れてきていた

けど、それは逃がしてもらって私だけ責任者で残った。警察か何かに引き渡されるまで、ちょっと待っていると言われて будка〔番小屋〕にいたときに思い付いて、警戒の軍人にトイレに行きたいと言ったんです。

そしたら、連れていってもいいかと彼は材木工場の人に聞いて、私を外に連れ出した。ここでしなさい。おしっこが終わったら逃げなさいって。

半谷：その辺もロシア的ですね。

薄井：急いで逃げるわけ。でも、どこから来たか分かっていて、翌日、ポルコーヴニックにめちゃくちゃ叱られました。結局、うやむやになったけれども、私が感心したのは政治部のキャプテンがいたんです。名前は忘れてしまったけれど、しっかりした人で、まず次の日、私に会ったら、не по себе〔まずいなあ〕と言ったわけ。何遍もそう言って、でも安心しなさいと言ったんじゃないかしら。だから、何もおとがめはなしでした。私は25年の懲役になるかと本当に思っていました。

半谷：今だから笑って言えますが、いろいろなことがありましたね。

薄井：そう。だから大変でね。1つ忘れられないのは、誰かと一緒に港まで歩いていったんです。なんでかというと、ドアを盗んだりしてだんだん形は整ってくるけれども、門を作ってスローガンを書いたりするにはペンキが要るでしょう。ペンキは船に行ったらあると思ったんです。

誰か1人ぐらい連れて港まで行って、すごい貨物船が止まっていたから手を振って、このくらいの高い所にデッキがありますよね。そこへ手を振って、「ちょっと用があるから、はしごを降ろしてくれ」。はしごを登っていった船長に会って、こういう事情で、おたくにペンキがあつたらもらえないか。あげる、あげる。だけど、その前にちょっと休んでいきなさいと、お酒と食べ物を出してくれた。

私はお酒が飲めないから嫌なんだけど、仕方がないでしょう。飲んだらやっぱり酔っぱらってしまったし、真っ赤になる。とても困ったけれど、帰りに外へ出たら寒さでパーッと酔いがさめていくの。ナホトカはそんなに寒くないけど、零下25度ぐらいはあったかもしれないからパーッとさめたんです。これなら兵舎に帰ってもみんなに分からないと思った。だから、喜んで帰ったんですが、兵舎に入ったら一遍でまた酔いがパーッと出て、急いで自分の寝台まで逃げていった。あれは忘れられないよね。だって、普通の人だったらお酒は喜んで飲むのに、私は飲めないから。

でも、ああいうときにロシア人は本当に親切よね。だって、あげると言っ

て、くれるだけで帰してもいいんだけども、すぐに帰さないでちょっと食事を出してくれて、お酒まで出すんだもん。だから、ロシア人のことをそんなに悪く言わないのは当たり前なんです。

半谷：でも、なかなかそういうのが記録に残っていません。

薄井：それはやっぱり口が聞けるからよね。

半谷：そうです、本当に。ロシア語ができるから。

薄井：だって、建築材料を探してうろうろしているときに、中央アジアから来た兵隊を1人助けたの。ルーブルをもらえないかと言って立っている兵隊が、町役場の所にいたの。共産主義は失業者がいないはずなんだから、君は役所に行って職業を見つけてもらいなさいと言って、そしたら、そうかと言って行ったけれども、あとはどうなったかな。その子はロシア語が下手なの。

半谷：しょうがないですね。

薄井：どこか *Средняя Азия* [中央アジア] の人です。

半谷：薄井さんは、抑留の思い出の地を訪ねられたことはあるんですか。

薄井：キルガ？

半谷：キルガとか。

薄井：行ったことはないです。通過しただけ。だから、57年に通過して見ただけ。

半谷：それだけですか。

薄井：ペトルシーは見たでしょう。キルガも見た。トゥリンスカヤは多分、夜のうちに済んだ。だから、トゥリンスカヤが見たかった。あそこは大変立派な観光地になります。春になったら、あまりに世の中がきれいでは私は感心したもん。ちょっと崖のある所で川が流れているんです。冬が終わって〔凍結した川が融けて〕水になる。しばらく待つと上流から氷のかけらがパーッと流れてきて、「春が来たな」でしょう。木の芽が出るでしょう。それから、丘の所は草原だから、まるで *ковёр* [絨毯] よ。いろいろな花が黄色やら、オレンジやら。それが一面ずらっと敷き詰められていて、あんなきれいな所は見たことがない。だから、トゥリンスカヤはとても見たかった。山がすぐあって。

帰国して友好祭に参加するまで

半谷：分かりました。さて、では日本に戻りましょう。戻られたのは昭和

24年の夏です。暑いですか。

薄井：7月25日だと思います。

半谷：戻られて、大学は何年残っていたのですか。

薄井：本当は15日しか残っていないの。だって、行ったときに3年生だったんだもん。放っておけば、8月の終わりに卒業になるはずでしょう。だから、16日残っているだけなのに、1年残っていることになっているわけ。

半谷：16日だけはできないですからね。

薄井：新制大学になっているから、旧制大学で修了していない人をどう扱うかという規定がちゃんとあって、3年まで行っている人はそれまで2回の進級試験を受けているから、3科目か4科目を取りなさいです。

半谷：それで卒業なんですか。

薄井：ええ。でも、勉強する気が失せている。

半谷：しょうがないですよ。

薄井：それから、バレエもあるし。バレエはうちに帰った翌日からスタジオに行ったんです。

半谷：さすがです。

薄井：それでも私がちょっと怒ったのは、うちへ帰って2週間ぐらいしたら大学から通知が来て、あなたは復学の届けが出ていないが、どうするのか。やめるのか。復員ご苦労さまも何も書いていないんです。偶然、時期が同じになったのかしら。

大学は学籍がある人が今度、復員したという〔舞鶴引揚援護局の〕通知をたぶん市役所からもらっていないと思うんです。だから、届けがないというのを偶然出したんじゃない？ 帰ってきたばかりなのに、そんなことを言うなよと。だけど、卒業しておいたほうが将来のために……。

半谷：普通はそうですね。

薄井：でも、1科目落としたんです。もう1年あれしたから。

半谷：結構長くいらしたんですね。帰ってきて2年行かれたんですか。

薄井：ええ。昭和26年卒業です。26年の6月、それも追試験で。詳しく言うと、都留重人先生の社会学がどうしても通らないの。社会学なんていう学問は昔はなかったから、どうなのか分からないけれど、共産主義社会を見ているんだから、社会学なら何か手掛かりの答えができるかもしれないと思って社会学も受けた。だけど、全然訳の分からない質問だから答えられなくて落ちました。2年目もこれを受けなさい。だから、また受け

たけれど、また分からないことで。

半谷：授業は出なかったんですね。

薄井：全然。都留先生の顔を知らない。大体、教室がどこかも知らない。それで追試験になったんです。これが最後です。追試験になったときに、都留先生にこういう事情で追試験になっています、いまさら勉強はできないし、もしこれで先生が合格点をくれなかったら、中退になってこれからの自分のキャリアに影響します、助けていただけませんかということを答案に書いて出したら。

半谷：それを答案に書いたんですか。

薄井：そう。答えの代わりにそれを書いて出したら、都留先生はOKしてくれたから私は卒業したの。

半谷：おめでとうございます。だから、大学は試験だけで事実上、帰国のときからバレエということですね。

薄井：そうそう。いかに追い付くか、大変よ。だって、ちょうど若いときに4年労働したから、体が駄目になっている。一からやり直して、年齢としては遅いんです。25だもん。

半谷：遅いですね。卒業された後は、バレエ関係の仕事をいろいろやっているということですよ。

薄井：だから、57年にそういうイベント[モスクワ平和友好祭]の通知があって、誰かが推薦するわけ。それでメンバーに入るわけです。

半谷：誰かに推薦してもらった。自分で手を挙げたのではないんですか。

薄井：あんまり覚えがない。もしかしたら手を挙げたのかなあ。でも手を挙げる気はなかったんです。だって、その当時のお金で12万円要ると¹⁶⁾。

半谷：賛助会費が要するというのは聞いています。

薄井：12万円は結構なお金です。私は行く気がなかったんだけど、母親にへそくりがあって、出してあげるから行きなさいと言われて、じゃあ行くかということになったんです。

半谷：だから、あまり前向きでないというか、行きたくて手を挙げたわけではないんですね。

薄井：うん。いろんなごたごたがあって政府が。

半谷：ビザを出さない。

薄井：人数を減らすとか、そういうことがあって、バレエの人も何人かいたんだけど、みんなやめて、あれは多分、バレエの人とモダンダンス

の人と一緒にになって互選をしたんだと思う。

半谷：これが500人のときの名簿です。

半谷：この中にお知り合いはいないんですか。

薄井：いない。

半谷：いないんですか。

薄井：一緒に行ったから、知ってはいる人だけでも。バレエの人はほとんどいなかったんじゃないかな。

半谷：じゃあ、事実上、バレエというよりモダンダンスの人の集まりなんですね。でも、そうなるとなぜ薄井さんがここに入っているのでしょうか。

薄井：そうですね。

半谷：畑違いの中に1人ですものね。

薄井：だから、出し物を決めてどうするというときに、知らないことをしなくちゃならないから私は大変でした。

半谷：私なんかは、ロシア語ができるからここに入っているのかなという気がするんですが。

薄井：150人にするときに、この人は第一にいたくちゃならない人とみんな思ったんです。

半谷：そういうことなんですね。言葉のためかな。

薄井：そうですね。500人のときは、薄井はどうでもよかったわけよ。

半谷：何となく入っているだけの人。

薄井：うん、何となく。

半谷：でも、絞るときは絶対に必要という判断が。

薄井：そう、そう。でも、500人のときに出し物を決めて、もう練習に入っていました。あれっ、石井かほるはどこにいるんだろう。

半谷：ここにはなくて、途中から入ったみたいです。石井かほるに佐藤祐子、このお二人は行っているがこの名簿には入っていない。

薄井：じゃあ、後から申し込んだんだね。

半谷：後から入ったのかなという気がします。

薄井：でも、石井かほると一緒に準備をしたのは覚えています。

半谷：バレエの？

薄井：ええ。芙二三枝子さんの作品の。

半谷：そうすると、ある段階で行くことになって、あまり乗り気ではないが行くことになって、絞られたときも言葉のおかげで残ったということに

なりますね。

薄井：そうね。

半谷：ちなみに、旅券闘争と言っているのがこの年の7月にずっとありますが、それには参加されているのですか。

薄井：警察に捕まりました。

半谷：やはりそうでしたか。

薄井：ええ。警察のトラックに乗せられて50メートルぐらい走ったら、降りなさいと言われて降りただけだけれども。形式的に捕まえたの。

半谷：そういうことをしても行こうという気はあったんですか。

薄井：それはそうですね。会費も払ってしまったし、行く気になっているんだから。私はちょっと懐かしいこともあるでしょう。

半谷：そうですよね。他の人とそこは違うところですね。絞り込みの現場にはいらしたんですか。

薄井：ええ。

半谷：出発の寸前の。

薄井：出発の寸前じゃなくて、割合前に決まりました。

半谷：そうですか。この論文¹⁷⁾にも書きましたが、部門ごとに決めてくれと言われて、中には誰が行く行かないでもめたと聞いているんですが。

薄井：われわれはもめなかった。何人か人数は決まっているんだから、そこに出席した人が、誰が行ったらいいとその名前を連記して投票しました。

半谷：投票したんですか。

薄井：ええ。

半谷：薄井さんも投票されました？

薄井：私も投票した。自分が何を書いたか分からないけれど、私は満票でした。みんなが行ったらいいと思ったんです。

半谷：そうなる、語学やソ連経験が効いているんでしょうね。でも、投票というのは初めて聞きました。自分が行きたいと言ってもめたという話を他の部門で聞いたことがあるので。

薄井：現代舞踊とバレエはもめませんでした。

半谷：行くことが決まったのは確か出発の前日か、その日の朝だったと聞いていますが。

薄井：いや、もうちょっと前だと思います。だって、私はかばんだって誰かに借りたし。

半谷：そういう準備の余裕もありました？

薄井：うん。

半谷：出かけるときに壮行会や見送りはありましたか。

薄井：なかったと思う。

半谷：東京から新潟に行って、新潟から船ですが、特にその間は何もなく。

薄井：特に何もなく。

半谷：当然ながら、外国に旅行で行くのは初めてですよ。

薄井：そう。

半谷：でも、お父さまがアメリカに行ったとか、周りに外国に行った経験のある人は結構いらした。

薄井：東洋史だった兄は、何遍も満洲に行きました。一番下の姉は、北京にお嫁に行っています。

半谷：そうなんですか。

薄井：ええ。日本人で、北京で商売をしている人のところにお嫁に行って北京に住んでいました。

半谷：だから、当時としては割と外国の経験がある、外地に行くという経験がある。

薄井：そういう家庭だったかもしれないです。

半谷：人によっては外国へ行くのが全く初めてで、外国が非常に遠く感じられたという話も聞いているので。

薄井：それから、やめになったけれども、日米学生会議なんていう組織があったの。ある年はフィリピンでやる。ある年はサンフランシスコか、西海岸でやるというのがあって、日本でやるときもあった。アメリカは日米学生会議で、フィリピンでやるのは日比学生会議かもしれない。

私の下の姉は、日米学生会議が日本であるときに出席しているんです。アメリカであるときにも行きたいと父親に言ったんですが、父親はお金を出してくれなかった。でも、私が行きたいと言ったら出してくれる。女は差別されているわけ。父親は、女は行くことないだろうと思っているんだ。ただ私が行くと言った時は、取りやめになりました。戦争がかぶったから。

半谷：このあたりは、外国の経験でも他の人と少し違うかな。

薄井：ちょっと違うかもしれない。

半谷：そう思います。〔1957年は〕船で行って、それから汽車ですが、開会式は間に合いませんでしたよね。

薄井：そうなんです。

半谷：いつ気が付かれましたか。要は、旅券闘争をしている間にちょっと日程がずれ込んで間に合わなくなったんですが……。他の人の話だと、ハバロフスクに着く前の電車の辺りだったとおっしゃっていましたが。

薄井：あまりよく覚えていないなあ。

半谷：スポーツの人は、最初からハバロフスクから飛ぶ予定でした。

薄井：開会式に間に合うように一緒に行く人も何人かいましたよね。

半谷：20人出ます。

薄井：20人ね。

半谷：だから、誰が行くのかは結構、話し合いがあったらしいのですが、開会式に日本らしい格好ができる人で、女性の着物を持っている邦楽の人を出すとか。

薄井：そうかもしれないです。

半谷：ナホトカからハバロフスクは一晩なので、私はあの辺りかなと思うんですが。

薄井：船かもしれないですよ。私は割合どうでもいいと思っていた。

注

- 1) 『毎日新聞』2016年10月9日朝刊の「ストーリー：薄井さんのシベリア抑留」
- 2) 日本人を抑留・使役したのは、多くは収容所を管理運営する内務省だが、全体の1割(抑留者約60万人のうち6万人)は赤軍＝国防省が編成した独立労働大隊に組み入れられ、鉄道沿線を移動しながら赤軍の用務に従事させられた。富田武『シベリア抑留』(中公新書、2016年)、48～49、161～167ページ。
- 3) 薄井さんの抑留先を順にまとめると、こうなる。①シベリア鉄道チタ駅手前のトゥリンスカヤの収容所(1946年春まで、第521労働大隊)②ハバロフスク郊外のクラスナヤ・レチカ(1946年5月から9月、第527労働大隊)③クイブィシェフカ手前のペトルシー(1946年9月から47年の秋、第522労働大隊)④キルガ(1947年の秋から48年10月、第522労働大隊)⑤ナホトカ(1948年10月から49年7月、日本送還者を集めた第380収容所)。労働大隊の部隊番号の典拠は、富田武『シベリア抑留』(中公新書、2016年)、164ページ。

なお、同書は第522労働大隊の所在地を「ペトルーシカ」駅と記している(典拠のロシア語原史料は、ст. Петрушки)。しかし、あえて「ペトルシー」と

したのは、シベリア鉄道に「ペトルシー」という駅はあっても「ペトルーシキ」という駅はなく、またロシア語の地名を耳で聞いて覚えた薄井さんが言い間違えるはずがないからだ。これは、そもそものロシア語原史料の誤記だと考える。

- 4) パレンスキーとの交友は、薄井憲二「昔の捕虜・今は国賓」『文藝春秋』1957年10月号に詳しい。
- 5) 薄井憲二「昔の捕虜・今は国賓」、285ページ。
- 6) 収容所の作業を管理するのは、一般に **прораб**（作業監督）と **нормировщик**（ノルマ係）。薄井さんは、回想を信じるなら、ノルマ係（「ノルマの本を見た」、計算もした）と作業監督（「誰をどこへ出すんだというのは全部、計画して毎日それでやっていた」）の仕事を兼務していたことになる。
- 7) 薄井憲二「昔の捕虜・今は国賓」、282ページ。
- 8) 薄井憲二「バレエ・リュスに憧れて」ダンスマガジン編『日本バレエ史』（新書館、2001年）、43～44ページ；『毎日新聞』2015年3月23日夕刊；『毎日新聞』2016年10月9日朝刊。
- 9) 高杉一郎『極光のかげに』にも映画を見せる話が出てくる。高杉一郎『極光のかげに』（岩波文庫、1991年）36～40ページ。
- 10) 捕虜の演芸会で薄井さんが「長い布をまよってさっそうと」創作バレエを披露したという。『毎日新聞』2016年10月9日朝刊。
- 11) 井上頼豊『聞き書き井上頼豊：音楽・時代・ひと』（音楽之友社、1996年）、110～118ページ。同書の口絵写真も参照のこと。
- 12) 抑留中の政治教育や民主運動と薄井さんとのかわりについて、抑留研究の第一人者の富田武氏から貴重な話をうかがった。長くなるが採録しておく（2018年1月27日、東京は三鷹駅北口の喫茶店で聞き取り）。

富田：そこで見聞きした民主運動の話は、オレも聞いていないし、あなたにも言っていないよね。

半谷：言わないですね。思い出したくないのか、経験してないのか、分からないですけど、民主運動の話はほとんどないです。

富田：四か所の労働大隊はなかったかもしれないが、ナホトカでは必ず民主運動はある。さっき収容所の飾りつけの話があったから（288ページ）、ということはやっているはずなんだよ。（第）二（分所）でやるかは分からないけど、（第）一（分所）と（第）三（分所）の出入りする時はね。待つ人は二、三か月待たされるのが当たり前なんだから。（中略）

つまり彼のような芸術家から見ると、（民主運動なんて）馬鹿らしいわけだよ。当時の映画とか記録をみると、みんなで輪になって、ナホトカでも舞鶴でもやっているやつ。そうでもしないと帰してもらえないと思うからするのかねえ。あるいは人によっては、四國さん（四國五郎『わ

が青春の記録』三人社、2017年)は集団的な高揚を味わうって言うけど、ボクからすると馬鹿ばかしくて、盆踊りじゃないかって思うんだよ。やっている人はたまたま感じだけど、忘れていた盆踊りをやっていると解釈すると成り立つ。「革命」という名前はついているけど。

つまり芸術家から見ると、馬鹿ばかしいと思ったかもしれない。だってまともな高尚なバレエはやらしてくれる訳がない。楽劇団って言っても、悪いけど……

半谷：演芸会に毛が生えたもの。

富田：そうそう。しょうがない、それは無理もないよ。だってプロはほとんどいないんだから。だから彼はそれで距離を置いた可能性はあるかなと思う。本当の芸術家から見ると、ちょっとおもちゃみたいなの、お遊びみたいなの……。こんなの付き合いでられるかよって。言えないけどね。そう思っていた可能性はあるね。私は本物を見た時、映画でだけだけど、それをやりたいと思って帰るわけでしょう。だからナホトカでやってるお遊びみたいなの、お遊戯みたいなのと同調しないと、ボクは。他人の悪口を言うような人ではないので、そんなことは言わないでおこう、生涯そう決めたのかも。仮にボクが同じ立場だったら、こんなのは芸術じゃない、何をふざけるな馬鹿やろうってね。人をこきつかっておいて何が活動だよって思うんだけどさあ。まあ、そこはちょっと違うだろうねえ。その場になってみないと分からないから。

半谷：民主運動は、ソ連の政治教育が核になっていますが、やっている多くが日本人なので、当時の日本人の精神構造が影響していませんか。何を良しとする、どういう行動パターンをとるのかという。

富田：本にも書いているけれど、公正な目でみたいと思っているから、民主運動がおこる要素はもってるんあったと思う。だって日本人は軍隊しか知らないわけだから。帝国の天皇制でしょう。自由にモノを言っていると、へえって思うじゃない。そこがあたかも、これはボクの持論なんだけど、アメリカが日本に民主化した、そのパラレルなんだよ。実はアメリカ軍は、太平洋でつかまえた日本軍にもやっているんだよ。大岡昇平に出てくるけど〔『俘虜記』〕。つまり敵国の捕虜を自分たちの味方につけたい、特に占領統治する場合のことを考えたら、やるのは当然だよ。要するに対抗してやっているにすぎないんだよ、アメリカに。民主主義に二つの形があったと、そう見た方がいい。それがボクの考え方。

日本が天皇制であり、軍隊制度であり、言論も何もあったものじゃない。それがとにかくモノが言える、上官に何か言ったら、極端に言えば銃殺だったのに、それが言えるわけだよ。「お前らけしからん、働きも

せずにメシばかり食って」って。

半谷：モノが言える時に、その形を与えたのがソ連の政治教育だったと。

富田：そうそう。ドイツに対してもやってるんだよ。あんまり効果がなかったんだけどね。日本人はその点、ちょっと同調的なところがあって、ボクは別のところにも書いたけど、スターリニズムと天皇制の精神構造がひょっとして相通じるのではないか。だから付いて行っちゃったという面がありそう。

半谷：マッカーサーへの手紙という本から分かるように（袖井林二郎『拝啓マッカーサー元帥様：占領下の日本人の手紙』岩波現代文庫、2002年）、日本人は絶対的な権力にすがりながら行動するというパターンが、あの時期にはあるんですよね。

富田：そうそう、ある。だから彼（マッカーサー）が帰る時は、民衆は沿道を埋め尽くして何十万っていう人が見送ったっていうでしょ。言ってみれば、代わりの神だったんだよね。代わりの天皇。それが、ソ連でいうとスターリン。

半谷：そう思えば、整理はできる。でも薄井さんは、そこから距離を置いているように見える。

富田：われわれは、もう気楽だから。何の体験もしていないし、こういう風に客観的に整理できちゃうんだけど、それは当事者から見ると色々でしょう。例えば四國さんは民主運動にかなり肩入れしているけど、ボクから見て過剰なくらい肩入れしているけど……。いずれ書くけどね（『シベリア抑留者への鎮魂歌』（人文書院、2019年））、彼は過剰な肩入れをしても、唯物史観とか、そっちの方の話は全くないんだよ。本当に政治教育が徹底していれば、そこに行くわけじゃない。文字通りのマルクス主義者、唯物論者。こうならないといけない、共産主義の実現こそすべてであるとか。でも、どこかそこから距離を置いている。彼は絵を描いているから……。彼は絵でケンカしたことがあるんだよ。

半谷：自分の世界のある人とならない人は違うんですね。

富田：そうそう。ある人は、何て言うかなあ、それが一種の拠り所になる。例えば、クリスチャンだと絶対に言うことをきかなかった。クリスチャンが稀に回想録を残しているけど、ソ連のマルクス史観という立場には同調しない。ましてや無神論なんか、端から毛嫌いするでしょ。やっぱり、そこは大きいと思うな。だから、こう言ったらかわいそうなんだけど、教育を受けていない兵隊は乗せられやすかったんだな。インテリは一応知っているからね。インテリがみんな立派な人だったとは限らない、天皇制主義者もいっぱいいたけど……。しかしやっぱり薄井さんくらいになると大学教育も受けていて、モノの理非が分かるからね。

半谷：薄井さんをどうまとめるか考えていて、私なんかは高杉一郎に比肩する存在だと思っているんですけど、どう思われますか。

富田：なかなか比べるって難しくて……。状況が違うし……。ただインテリなのは共通。

半谷：だから今言った自分の世界がある。

富田：そうそう。内村(剛介)さんも、極端だけど、そうだしね。ボクの知っている範囲ではそうだねえ、満鉄にいた有名な(辺見じゅん作の)『収容所からきた遺書』の主人公、山本幡男さんや、その上司だった満鉄の佐藤健雄さん(栗原俊雄『シベリア抑留最後の帰還者：家族をつないだ52通のハガキ』角川新書、2018年に詳しい)。こういう人たちは自分の世界と判断根拠を持っていて、あっちに行ったりこっちに行ったりしない。ただそれ以上の共通点があるかという、なかなか難しい。ボクは石原吉郎が大好きだけど、特異だよね、あそこまで行く人は滅多にいない。彼は別物だと思っている。

半谷：70年経って、抑留の体験記として読むに足るものは、自分の世界があった人というのが共通項なのでしょうね。

富田：おとし(2015年)シベリア抑留者支援・記録センターが賞(シベリア抑留記録・文化賞)をあげた九大の先生(上尾龍介九州大学名誉教授、2017年5月死去)の本(『一塊のパン—ある学徒兵の回想』上下巻、中国書店、2015年)も読んだけど、しっかりしてるなと思った。ずいぶん後になって、90になってから書いたんだけど、おそらくメモがあったに違いないよね。そういっちゃあ、ボクらが知識階層の人間だからかもしれないけど、心ひかれるのは、そういう人たちの書いたものだよ。しっかりしているから。付和雷同しているわけではないから。

ボクが一番いいなと思って、しきりと引用しているのは、伊藤登志夫『白きアンガラ河』(思想の科学社、1979年：後に講談社学術文庫、1985年)。学者じゃないと思うんだけど、帰ってから思想の科学に入って自分を磨いた人。そういう経験も生かして書いている。ボクは最初の本で読んだけど、「へえーっ」と思って感心してさ。自分の捕虜という経験を対象化している人は、そういないよね。元軍人とかのはね、恨みつらみだけじゃ。ソ連憎しばかりでしょ。あるいはその逆ね、ソ連万歳みたいな。そのどっちかしかないわけ。だけど冷静に見る人はちゃんといる。その先駆者が高杉さん。内村さんは獄中が長くて、発表はずっと後になっちゃったけど。そう多くはないんだよ。

薄井さんは、自分の世界があったのが大きいよね。

- 13) 3回しかもらわず、しかも1回分は「スターリン感謝横断幕」の募金に消えた『毎日新聞』2016年10月9日で語っている。2016年に横断幕と再会

した時の様子は、同記事に詳しい。また後出（注14）の『シベリア抑留関係資料集成』に口絵写真として収録されている。

- 14) 抑留者の家族との文通は、1946年7月に認められた（三カ月に1通が標準）。富田武、長勢了治（編）『シベリア抑留関係資料集成』（みすず書房、2017年）182、184～187ページ。
- 15) 富田武『シベリア抑留者たちの戦後』（人文書院、2013年）49ページの説明を引用する。「ナホトカには送還のための（第三八〇）収容所があり、閣僚会議付属送還業務全権代表の管轄下にあった。収容所は（当初は三、やがて）四〔つ〕の分所から成り、第一分所は駅出迎え、人員点検、入浴、滅菌消毒、第二分所は被服点検、支給、第三分所は輸送梯団編成、乗船待機、第四分所は病弱者収容、病院船待機という業務分担だった」
- 16) 友好祭に参加した箏奏者の後藤すみ子さんは、25万円だったと証言している。2015年10月31日、東京は成城のご自宅での聞き取り。
- 17) 梅津紀雄、半谷史郎「「邦楽4人の会」の誕生：オーラル・ヒストリーの中のモスクワ青年学生平和友好祭（1957）」『SLAVISTIKA』第32号（2016年：発行は2017年7月）、191～212ページ。